


博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）

中川裕 

学位申請者 高橋康德

論文名 「上海語変調の音韻的構造」

1. 総評

本博士論文は、中国語諸方言における変調（Tone Sandhi）の中で、国際的にも注目度が高い上海語のそれを対象とし、未解決の重要な問題に焦点をあてて主に共時音韻論の立場から解明を試みたものである。本論文の学術的特色は理論的な問題について多くの音響分析を積み重ね、音声事実を重視した音韻解釈を提示することに成功した点にある。このような精密な実証的研究手法の重要性は自明であるにもかかわらず、従来の研究には希少であった。その意味で本論文の価値は高い。また、各章におけるデータ提示と論述を通じて、上海語の変調の全体像が概観できるように工夫されており、研究成果の表現という点でも良い評価をうけた。さらに、音韻理論研究や上海語の記述研究にも十全な目配りがなされており、その広い視野が、本研究の貢献する領域に良いバランスを生み出している。

この博士論文は、中国語諸方言の伝統的記述研究にとってもまた一般的な音声学・音韻論の研究分野にとっても重要な貢献をなすものである。審査委員会は、論文審査と最終試験の結果、委員全員一致で、学位申請者である高橋康德氏に対し博士（学術）の学位を授与することが適当だという結論に至った。

なお、審査委員会は、中川裕（音声学・音韻論）を主査とし、学外から佐藤大和氏（音声学、前本学教授）と岩田礼氏（中国語学、金沢大学教授）、学内から三宅登之教授（中国語学）と中山俊秀准教授（言語学）を副査とする5名で構成された。

2. 論文の概要

論文は次の6章からなる。

- 第1章 序論
- 第2章 先行研究による上海語の基本声調および変調の音声学的記述と音韻論的分析
- 第3章 T5(陽入)変調4音節語における変調変種の出現分布
- 第4章 応用式変調で挿入されるデフォルト声調の音声実現と音韻解釈
- 第5章 窄用式変調の分析：音声的現象かそれとも音韻的現象か
- 第6章 上海語変調体系の探求とその意義：結論に代えて

第1章で研究の背景、意義、独創性、接近法とその正当化が明確に述べられたあと、第2章で、関連する先行研究が批判的にレビューされる。取り扱われる先行研究は中国語音韻学の伝統における構造主義的な記述研究から最新の理論的考察までひろい範囲にわたる。それらのレビューの過程で、この博士論文にとってもっとも本質的な問題の設定が明確になされる。第3章、第4章、第5章は、高橋氏が一次資料をみずから収集し分析し考察をする本論文の独創性をささえる本体となっており、いずれの章も妥当な方法論の設計と、慎重で的確な分析と解釈が、端的で明解に記述され論じられている。精緻な音響分析による客観的な証拠をもとに高度に実証的な記述がなされるとともに、自立分節素理論や韻律理論による従来 of 考察をさらに前進させる理論的含意をもっている。最後に、第6章は、第3章から第5章の議論を総括して、応用式変調と窄用式変調が上海語の変調体系をどのように構成しているのかを考察し、上海語の変調体系の特徴を次のように要約している：応用式変調は、音声レベルとは直接関わらない音韻的な変調であるが、形態統語構造の影響を受ける。いっぽう、窄用式変調は音声レベルの変調である。応用式変調と窄用式変調は文法部門から音韻論および音声学それぞれ別のレベルで独立して存在する。

3. 講評

審査委員から次のような評価が示された。

- (1) 研究課題の設定のための着眼点である上海語における変調の再考察は、中国語学的にも音韻理論的にも、学術的に価値が高く、研究結果のインパクトが大きい。
- (2) 言語構造全体における位置づけを明確にしながら変調を記述するためのモデルを提案しており、これは今後の中国語諸方言の変調の通言語的比較にも役立つであろう。
- (3) 音響分析による信頼性のある分析にもとづいて問題の考察がなされている。これにより強い説得力をもった判断を下すことに成功している。
- (4) 考察の対象に窄用式変調を含め、その分析と解釈に成功している点は、すぐれた実証的貢献である。
- (5) 研究課題の設定や論理の展開が明快で理解しやすく表現されている。上海語の音韻現象の形式的記述も他分野の研究者に分かりやすく提示されている。

審査委員はみな一致して、同論文の学術的貢献を考慮し、この論文を是非、モノグラフとして出版することを勧めた。より良い内容と表現のモノグラフとして将来的に出版するために、さらに次のような助言的コメントがあった。

- (1) 生成音韻論の発展にとっての本研究の含意を明示的に述べるとよい。
- (2) 「音韻化」の定義についての議論を加え、本論文の立場を明確にすると良い。
- (3) 3音節以上の語の例として外来の地名を用いているが、外来地名と中国地名の間に音韻的振る舞いの差異が無いことに触れるとよい。
- (4) 正規化していないピッチ曲線データに興味をもつ読者もいる。付録をつけると良い。
- (5) 第3章に見られる部分的現象の観察にもとづく通時論的考察から導く結論はもう少し慎重な表現でなされるのが良い。

最後に付け加えると、本論文の第5章の初期のバージョンは、日本中国語学会の学会学術誌である『中国語学』第258号に「上海語声調音韻論における窄用式変調の地位」として掲載され、さらに、第12回日本中国語学会奨励賞を受賞した。このことは、本博士論文の水準の高さを示す。また、ここから、高橋氏の研究がすでに日本における中国語研究に意義のある学問的貢献をしていることを見て取ることができる。

4. 総合的判断

高橋康德氏の提出博士論文は、従来の上海音韻論研究に対する問題の提起の独創性、考察を進めるにあたっての徹底した実証性、分析結果から引き出される議論の高度な理論性、いずれにおいても、学術的価値の極めて高い優れた研究である。博士号取得にとって十分な高い水準を満たしている。最終試験における口頭試問では、論文の内容が端的で明解に要約され、主要な論点が分かりやすく提示された。審査委員からの質問にたいする回答も、すべて丁寧かつ分かりやすいものであり、自身の研究の学問的背景や価値や限界について良く理解をしていることを示す申し分のないものであった。

高橋康德氏は、言語研究の分野で学術的な貢献をなし得る高い研究能力をもち、将来にわたり専門研究者として十分に活躍できると判断される。したがって、審査委員会は、全員一致で、この研究が博士学位（学術）を授与するに相応しいと結論した。

補足参考資料（第3章～第5章の要領）

第3章は上海語の広用式変調にみられる変調変種の分布を分析し、その実現パタンの要因を、形態統語構造と文タイプをパラメータとして考察する。その結果、T5が第1音節となる4音節語では上記の2種類の変調変種に加えて、「2+2変種」という第3の変種が観察されることが明らかとなる。この3種類の変調変種は形態統語構造の違いによって異なる分布を示すことが判明した。これは、変調変種の出現が形態統語構造の影響を直接的に受けていることを意味する。さらに、なぜ「2+2変種」と「第2音節拡張変種」が「2+2複合語」でしか現れなかったのかを、韻律的な観点と変調の通時変化の観点から考察する。

第4章は、3音節以上の語において広用式変調適用の際に挿入されるデフォルト声調の音声実現調査とその音韻解釈を行う。従来の研究は広用式変調が起きる語の第2音節には第1音節の声調が拡張し、第3音節以降にはデフォルトのLow声調が挿入されると解釈する。デフォルト声調に関する理論によると、デフォルト声調は挿入される段階により音韻パターンや音声実現が異なるので、この理論装置を用いる際は、音韻派生のどの段階で挿入されるのかを明確にする必要がある。ところが、従来の研究では未解決のままである。そこで、3音節語と4音節語のピッチを音響音声学的に精密に観察・記述したうえで、上海語のデフォルト声調挿入の段階を探る調査を行った。その結果、デフォルト声調は、語彙的に声調が指定される非軽声音節と類似の音声実現を見せることが分かり、音声レベルでピッチターゲットが指定されると北京語の軽声音節の音声実現とは異なることが判明した。これらの結果を踏まえ、上海語のデフォルト声調は遅くとも音韻レベルの最終段階までには挿入されると解釈する。

第5章では、窄用式変調が起きた音節のピッチを音響音声学的に記述して、この変調の音韻論的な地位を考察する。窄用式変調は動詞+目的語、主語+述語などの限定された句構造のみで適用される。従来の記述はこの変調が適用されると曲線声調が水平声調に変化し、T1（陰平）とT2（陰去）が[44]という同じ調値を取ると報告し、これを、(1)発話速度が速くなるにつれてピッチの幅が連続的に縮小する現象とみなす音声的な解釈と(2)ストレスに起因した水平声調化と声調の中和現象とみなす音韻的な解釈が提案されてきた。しかしながら、客観的な音声データの欠如のため、いずれの解釈が正しいかの決着がつかなかった。本研究では詳細で精密な音響音声学的調査を行い、上海語の窄用式変調が音声レベルで起きる現象であること、すなわち音韻的な解釈ではなく音声的な解釈が正しいことを示唆する結果を得た。